

瓦礫の中の美術展

パレスチナから考える〈アート〉の可能性

2012年7月13日（金）

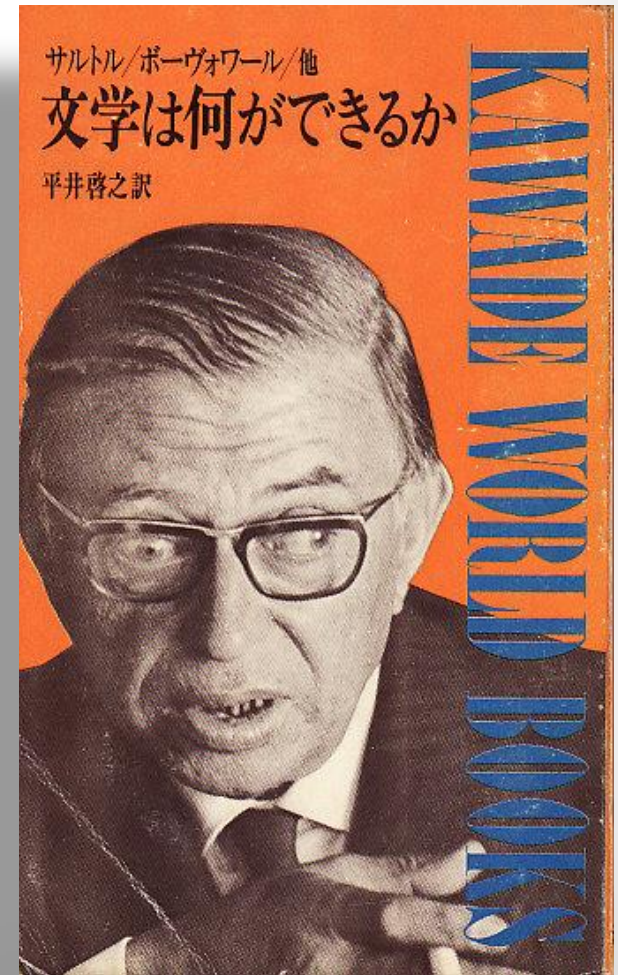
岡 真理（人間・環境学研究科）

アル＝アクサーインティファダ (2000年9月末～)



サルトル 文学は何ができるか？

- アフリカで飢えている子供たちの前で文学は無力である、
- 作家たるもの、このような現実を前にして筆を折らなければならないこともある



- 今にも餓死せんとしている子供の命を、「文学」は救うことはできないかもしれない。
- （イスラエル占領下で、イスラエル軍がパレスチナ人を殺戮しているとき、「文学」はそれを止めることはできないかもしれない）
- その意味では、「文学」はたしかに無力である。
- しかし...
- そうであるとすれば、「文学」は、食うに困らない者たちの奢侈のための「余剰」ということになる。

- サルトルの問いを、「文学」もまたその一部であるところのアート（芸術表現）一般に敷衍
- 「アート」は何ができるか？（＝パレスチナでパレスチナ人が殺戮されているとき、アートは無力なのか？）
- パレスチナ（イラク、アフガニスタン...）をめぐるアーティスティックな表象を通して、この問いを考える。





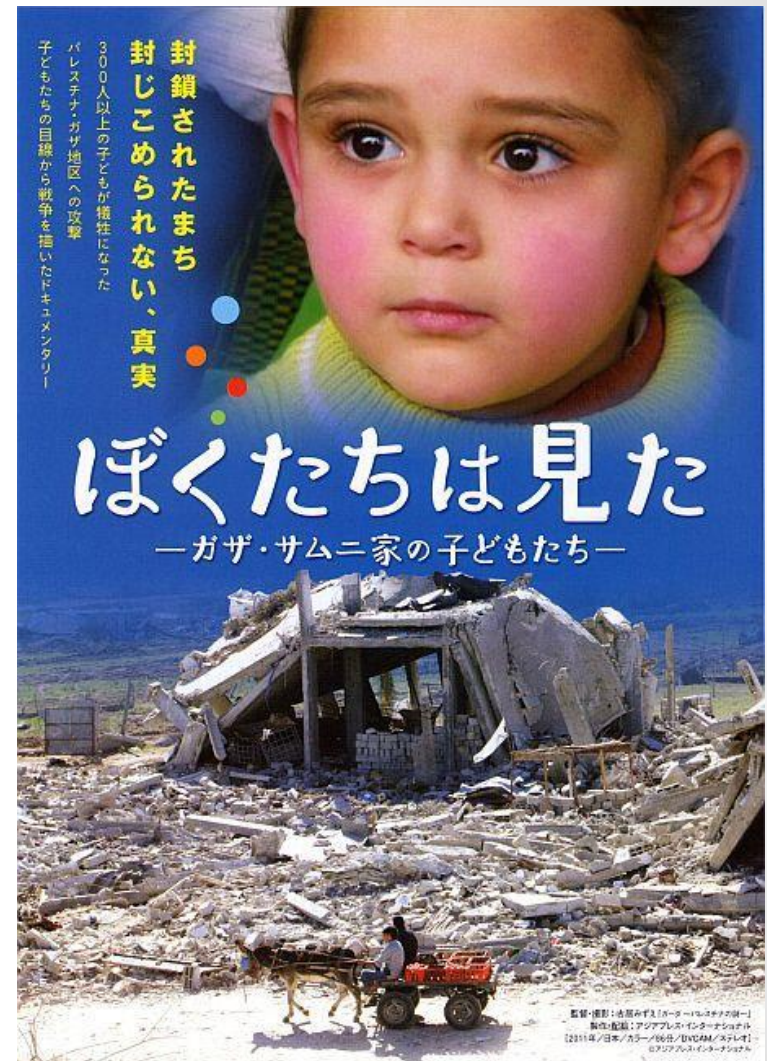








- ガザ攻撃
(キャスト・レッド作戦)
- 2008年12月27日～
2009年1月17日
(22日間)
- パレスチナ人の死者
1400名以上



• 瓦礫の中の美術展

停戦直後、ガザの画家たちが、破壊を免れた自分たちの作品を半壊した建物に持ち寄り、展示。

「瓦礫の中の展覧会」と題し、その写真の世界に発信。

それがほかならぬ「美術展」というアートの形で表象されねばならなかったのはなぜか？



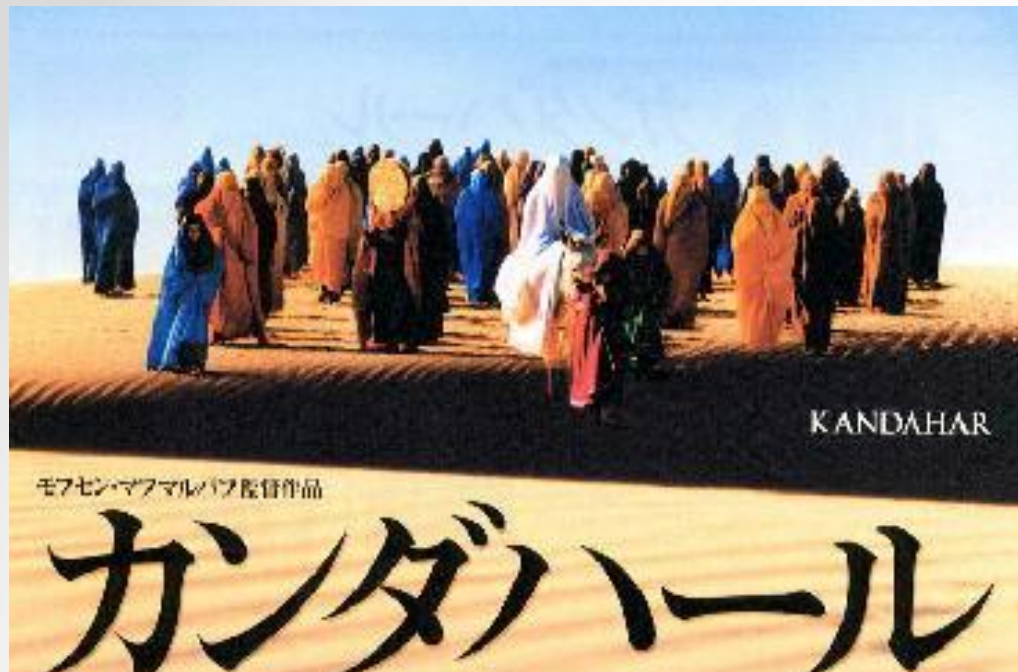
- アブデッサラーム・シェハーデ監督
『レインボー』 (2005年)





「大地の慟哭」

これまで人間はさんざん土地（＝大地）のために泣いてきたのだから、今度は、大地が人間のために泣く番だ



2001年カンヌ国際映画祭主コンペティション部門出品

2001年ムンヘン国際映画祭コンペティション部門出品

日本国元ICC賞受賞映画祭受賞映画祭日本映画協会賞

制作国元ICC賞受賞映画祭受賞映画祭日本映画協会賞

制作国元ICC賞受賞映画祭受賞映画祭日本映画協会賞

制作国元ICC賞受賞映画祭受賞映画祭日本映画協会賞







イメージのないアフガニスタンにイメージ
を与えたかった...

— モフセン・マフマルバフ







アフガニスタンの仏像は破壊されたのではない
恥辱のあまり崩れ落ちたのだ

モフセン・マフマルバフ
武井みゆき・渡部良子 訳

朝日新聞「天声人語」で紹介(10/10、10/11)

映画『カンダハール』で国際的注目をあつめる
イランの巨匠マフマルバフが、アフガニスタンへ
の世界の無知に、いま差しだしたメッセージ。

これは報道ではない。

苦しみにある隣人のために綴られた言葉である

現代企画室



courtesy of filmstap



- Spaciocide (スペイシオサイド)
= 空間の扼殺





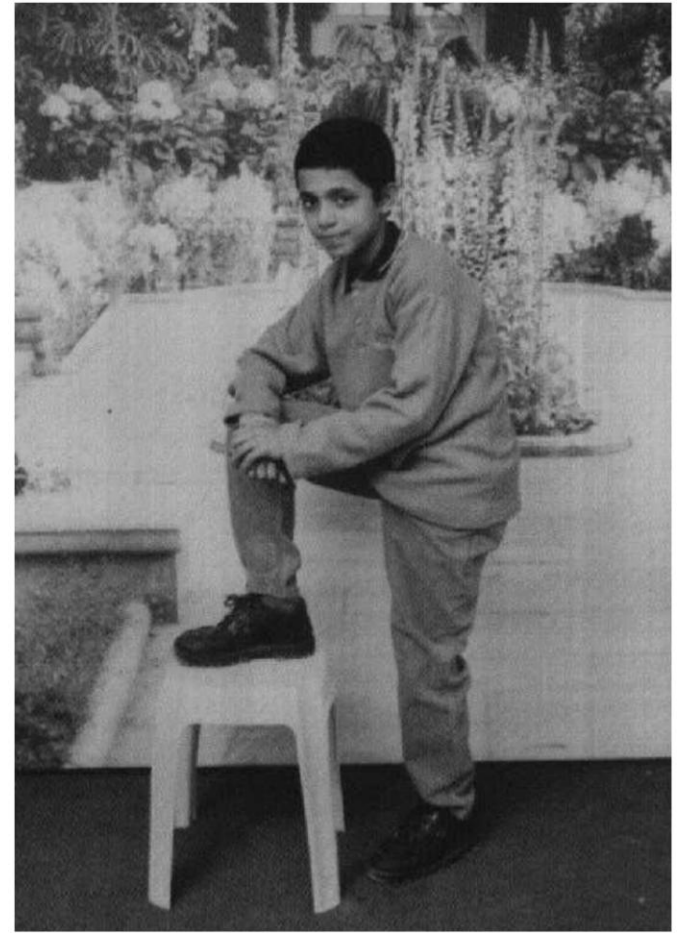
MyConfinedSpace.com





シャヒード100の命展

～パレスチナで生きて、死ぬこと～



シャヒード、100の命

هيد - مائة حياة

パレスチナで生き

100 SHAHEED - 100 LIVES

Text: Adila Laïdi | Photographs:

アディラ・ラーイディ 著 | イズベル・デ・ラ・クルーズ 写真 | 岡

忘却の淵からすくい上げら
ごく普通の人々。
押さえ付けることのできな
人間の自由への憧れ、
その現実と夢について。
パレスチナの100人の
シャヒード、「証人」たちの
真実を再現する。



Salah Al-Najmi

16 years old. Salah leaves behind his 9-member family. Salah's family is originally from the Manshieh Quarter in Jaffa, and now lives in the Maghazi Camp in Gaza. He completed his elementary education and started working as a carpenter to help his father, himself a garbage collector, in supporting the family. He was a cheerful young man, who'd help his mother and sisters with the household chores. During demonstrations, Salah loved carrying the Palestinian flag, made out of his own clothes. On October 22nd, he participated in demonstrations near the Kfar Darom settlement where he was shot in the heart and killed instantly.

サラーフ・アル＝ナジュミー

16歳。サラーフの家族は、ヤーファのマンシーエ地区の出身で、現在はガザのマギージー難民キャンプに住んでいる。

サラーフは小学校を卒業すると、大工として働きながら苦しい家計を助けた。父親はゴミの回収が仕事だった。10人家族がとても小さな家に暮らして



いた。陽気で、いつも母親や姉妹を手伝って、家事を助けた。

抗議デモの間、サラーフは自分の服をつぎはぎしてこしらえたパレスチナの旗を掲げて歩くのが好きだった。2000年10月22日、サラーフはパレスチナの旗を持ってイスラエルのクファール・ダロム入植地の近くで起こったデモに参加した。そこで心臓を撃ち抜かれ、即死した。















フランクフルト『夜と霧』より

とうてい信じられない光景だろうが、わたしたちはアウシュヴィッツからバイエルン地方にある収容所に向かう護送車の鉄格子の隙間から、頂が今まさに茜色に照り映えているザルツブルクの山並みを見上げて、顔を輝かせ、うっとりとしていた。わたしたちは、現実には終止符を打たれた人間だったのに——あるいはだからこそ、何年ものあいだ目にできなかった美しい自然に魅了されたのだ。

また収容所で、作業中にだれかが、そばで苦役にあえいでいる仲間に、たまたま目にしたすばらしい情景に注意をうながすこともあった。たとえば、秘密の巨大地下軍事工場を建設していたバイエルンの森で、今まさに沈んでいく夕日の光が、そびえる木立のあいだから射しこむさまが、まるでデューラーの有名な水彩画のようだったるときなどだ。

あるいはまた、ある夕べ、わたしたちが労働で死ぬほど疲れて、スーブの椀を手に、居住棟のむき出しの土の床にへたりこんでいたときに、突然、仲間がとびこんで、疲れていようが寒かろうが、とにかく点呼場に出てこい、と急きたてた。太陽が沈んでいくさまを見逃させまいという、ただそれだけのために。

そしてわたしたちは、暗くもえあがる雲におおわれた西の空をながめ、地平線いっばいに、鉄色から血のように輝く赤まで、この世のものとも思えない色合いでたえずさまざまに幻想的な形を変えていく雲をながめた。その下には、それとは対照的に、収容所の殺伐とした灰色の棟の群れとぬかるんだ点呼場が広がり、水たまりは燃えるような天空を映していた。

わたしたちは数分間、言葉もなく心を奪われていたが、だれかが言った。

「世界はどうしてこんなに美しいんだ！」

(池田加代子訳、pp .64-66、みすず書房)

カズオ・イシグロ『わたしを離さないで』



In fact, every time I see sun shines, I feel as if it smiles to me. Every time I see those small yellow flowers, I like to smile and smile. Every time I go to the university, even though sometimes I'm obliged to, but I know that in the end of the day I'll get out with something useful, and most important are the precious moments I spend among friends and colleagues. Every time I get deeply frustrated that much that I suffer a heart ache and sometimes I feel that it is my end!



I open the window of my bed room and wonder the sea, the sky; the moon light, and the stars ... even darkness has its own beauty! Otherwise, I go for my Holy Book, read some verses of the words of my Lord, come to relax and ... I'm alive! With all those frustrations and hopes around it is no wonder that next week I will be reading with my drama students *Valley Song* by South Africa's anti-apartheid white playwright Athol Fugard.

時くことと刈ることと

サパティスタ民族解放
軍マルコス副司令官の
ガザについての声明

2009年1月6日



2日前、わたしたちが暴力について論じたその日、
合衆国高官の恐れ多いコンドリーザ・ライスは宣
言した、ガザで今起きていることは、パレスチナ
人の暴力的性格ゆえのことであり、彼ら自身に責
任があると

世界の地下を縦横に走る水脈が、世界の地勢を変
えてしまうこともあるというのに、彼らが歌う歌
はいつも同じだ

そして今、わたしたちが耳にしているのは、戦争
と苦しみの歌だ

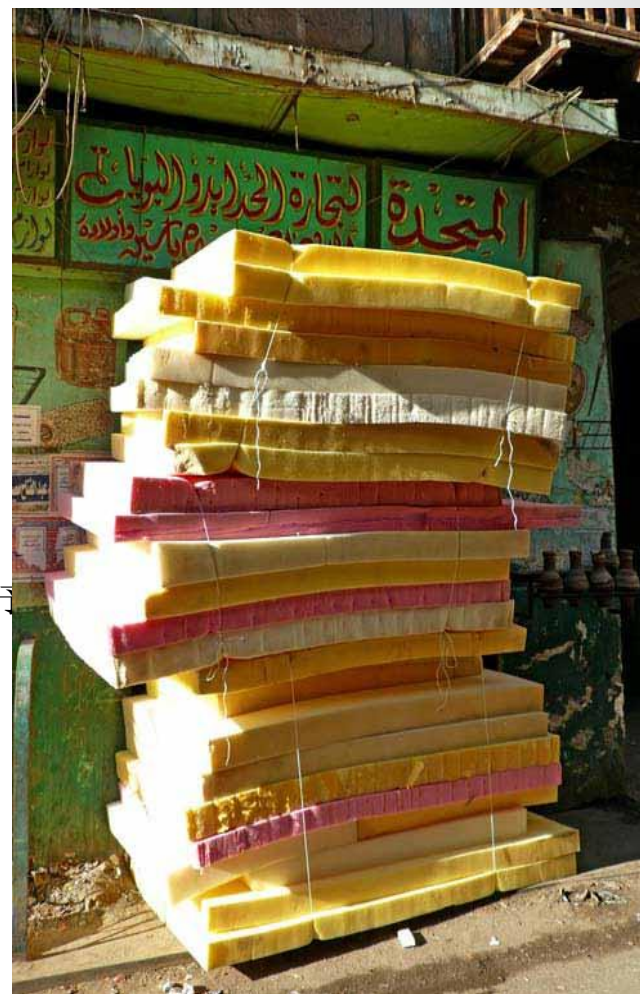
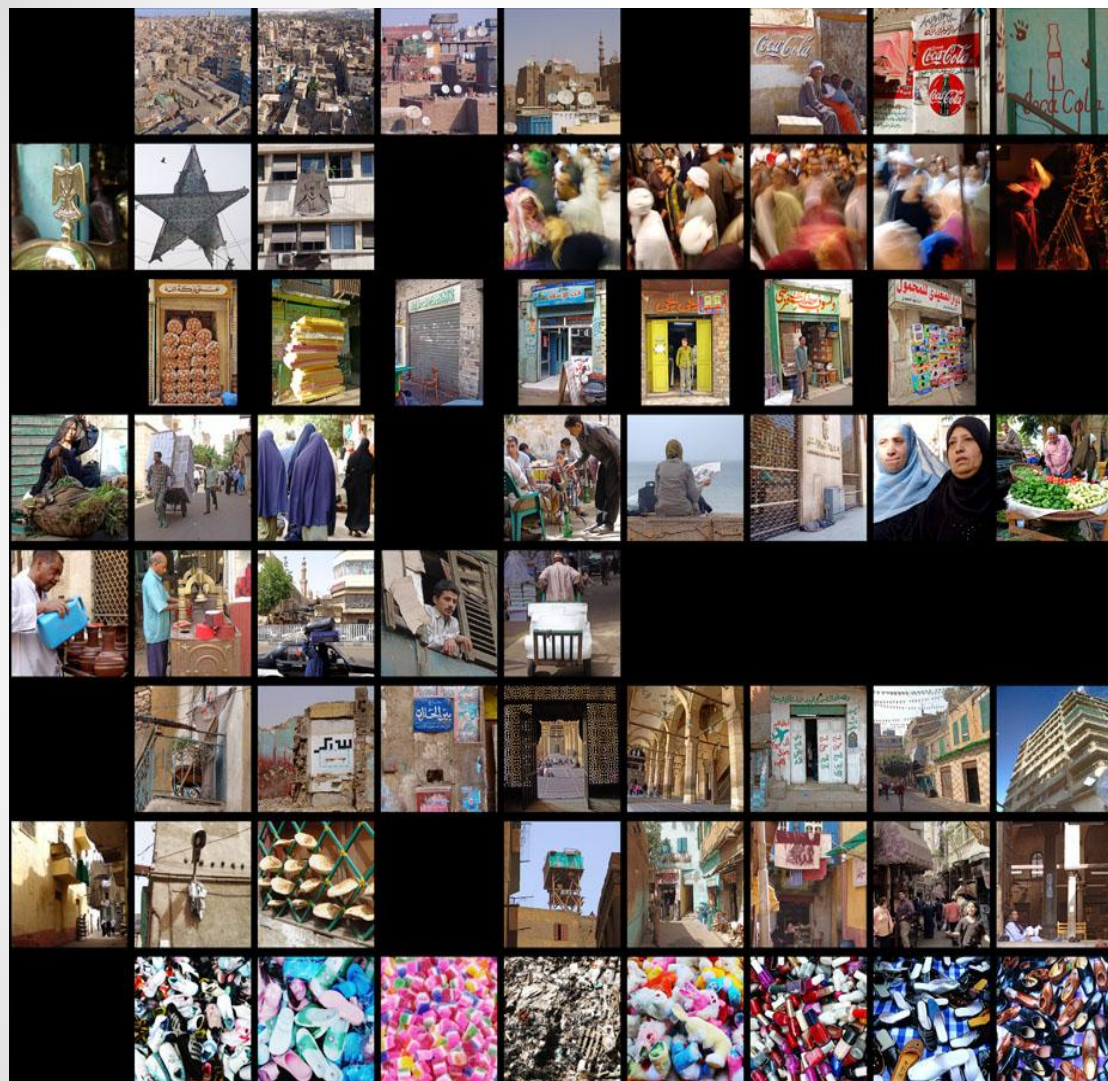
ここからさして遠くないところ、中東の、パレスチナの、ガザと呼ばれるその場所、わたしたちのほんのすぐ傍らで、訓練を積み重武装したイスラエル政府の軍隊が、死と破壊の行進を続けている...

アラブ・エクスプレス展：アラブ美術の今を知る



2012年 6月16日～10月28日 森美術館

- 中近東現代美術展 (仮称)



モアタズ・ナスル Moataz Nasr (エジプト生まれ、在住)

Cairo walk, 2006



アマール・ケナーウィ Amal Kenawy (エジプト生まれ、在住)

Silence of the Lambs, 2010

- 中近東現代美術展 (仮称)



ハサン・ミール Hassan Meer (オマーン生まれ、在住)
Wedding-1, 2011-12



oppressed by the heat, he sat under a tree
and reached into his saddle-bag,

シャリーフ・ワーキド Sharif Waked (イスラエル生まれ、在住)

To Be Continued, 2009

- 中近東現代美術展 (仮称)



サーディク・クワイシュ・アル・フラージー Sadik Kwaish Alfraji

(イラク生まれ、オランダ在住)

The House that My Father Built, (once upon a time), 2010

